

ミオヤの光 不離の巻

目次

1 今日が大切	一
2 此の體を活かし給はる目的	二
3 すべてにつきてミオヤの慈悲に感謝し奉らむ	四
4 無量光の中に活きる者は必ず無量壽に活く	五
5 只要す如来と常に離れざることを	六
6 如来様と一しよなれば地獄の火の中でも楽しい	八
7 日々つとめを悦びて	九
8 忍	三
9 生きる爲の念佛	四
10 心のすみかえ	六
11 苦にも難にも遭遇して一心を磨き	九
12 如来様を御佛壇の中にをさめて置いて自分一人に成つてはゐませぬか	二二

13 心は同じ御光の中	二五
14 御光によりて心を取りかへて戴けば悲も變して喜に不幸も轉して幸福に	七
15 和泉式部の更生	二六
16 病	三
17 人間に死ぬ生命と永遠に死なぬ方との両面	三三
18 ねてもさめても如来に離れぬやう	三三
19 婦人會	三六
20 自己に記す歴史の飾り	三九
21 尼衆	四
22 オーガストンの母	四
23 稱名も讃歌も要は光明をうけるため	四
24 道徳の根底	四

今日が大切

蕭せうみておもんみれば、無量壽むりやうじゆ經きやうの序文じゆぶんに、彌陀三昧みださんまいに入りなされた釋迦牟尼佛じやくかひにぶつが爾時にに世尊せぞん諸根しよこん悅豫えつじゆの姿色しせき清淨じやうじやうに光顏くわんげん巍々ゑいゑいたりと淨滿月じやうまんげつの麗れいはしき御姿ごしと御色ごしきとに現はれし御さまこそは、西にしに輝あやめく阿彌陀如来あみだにょらいの日光にちかうの映うつひし御姿ごしにて、我等衆生われらしやうじやうの爲ために誰人たれひとも阿彌陀如来あみだにょらいの智慧ちゑと慈悲じゐと威神ゐじんの永とこしへに照てし玉たまふ光明くわうみやうに反映はんえいする時は、器きの大小だいせうに拘かはらず、彌陀三昧みださんまいに入りて、慈光じくわうに充みる時は、譬たとひ三日月さんじつげつばかりとても、誠まことに三昧さんまいの窓まだに開ひらければ、如来にょらいの日光にちかうは必ずかならずく反映はんえいす。すべからく疑うたがふ心こころなくひたすら念佛三昧ねんぶつさんまいに心こころをかけよと教をしへ給たまはりし。我等われらが幸さいはひに若ごとし人生じんせいこの彌陀の光明くわうみやうに依よりて、靈れいに活いさるゝみのりにあふことなかりせば、今日々々こんにちのいと大切たいせつなる時間じかんを空ひらしく暮くらし、徒ただらに過すすべきものを、大經だいきやうに世尊せぞんは自ら模範もはんを示しなされて、ことに今日々々こんにちが大切たいせつなればとて、今日世尊こんにちせぞん今日世雄こんにちせゆうとて、かの五度ごた迄までも今日こんにちといふ事を

ならべなされしは、全く今日々々を彌陀の光明にいかされるやう聖意のほどこそ知り
れり。世に主義と目的と定まらぬ心の生活ほどあさましきはなしと存候。只其の日
々を飲食寢起のみに心を奪はれて、冥より冥に入るの外なきものは、實に愚にて
候。

願はくば光明主義を以て人生の命とし、益々光明中に日に新たに、月々に向上
して、下品より發足して、月に年に進みて、一生の終りには、上品の蓮臺にのぼらん
事こそ望みにて候。

名古屋のさとに懐かしき、きよき同胞愛らしきいさぎよき子供たちの居る夕日輝く
そなたに、大みやと共にもぎり深き人々を思へば、ゆかしくもかんばしくも感じら
れて候。

此の體を活かし給はるる目的

法身てふ大みおやの御恵みと御力とに依りて、萬物は行はれ、すべては活かされあ
るものなるを信する時は、此頃の氣節は毎年曇り、氣は濕ぼくなりて、折々雨は繁く
降りくだるもすべての植物は新緑已に萌し、今を盛りに榮えんとする頃なれば、其ら
を潤す恵みの乳にてあれ。若しもこの乳汁の繁くあらなくば、いかに今年の若緑りも
元氣よく榮へゆくなきを植物の繁りてやがて實のりを充分にするのは、要する處愛子
なる我等が糧を與へ給ふ慈悲の御はからひと信する時は實にかたじけなきこと。よま
りとは知らず、世の人々が此の頃の様に雨が繁くては困りつる杯と御慈悲を忘れて、
仇に思ふ恩かきよ。而して若しも米の實のりの能くなき故に、米價騰貴すれば又かこ
ち言をくりかへす人々のあさましさよ。大みおやはよろづにつきてかく迄に御心づく
しに我等を恵み給ふ慈悲の深きをば、將た何が爲ぞとたづぬれば、今此の體を活かし
て玉はる目的は、私共の心靈を永遠に眞の生命と、圓滿なる人格なる佛になさんか爲
の方便として、天地の恵みとなりて、此身を養ひ玉はる事を信する時は、是非とも今

度は慈悲のみおやに温められて、佛性の卵は孵化して、現在を通じて永遠の生命を發
見せざればならぬものと存候。我は是全く父の寵兒なりと自覺する時は、昨日迄
の我とは違ひて、天地も新らしく、萬物も悉く清らかに感じられ候。

願はくば如來の慈悲によりて、新たに生れし吾同胞よ、ますく御恵みの乳にて、
發育のいよく榮えん事を望ましく候。

すべてにつきてミオヤの慈悲に感謝し奉らむ

此頃來は、何かと容易ならぬ御世話様に相成り、又出立の砌りも御見送被下、難有
く御禮申上候。

すべては夢まほろしのかりのことなれども、只々無限の大慈悲のみおやの、天地法
界にみちみてるまことの御恵みを以て、此の身心に充しめんが爲に、清き御名を稱へ
て時々刻々に向上せん事を願はしく候。此の頃田圃の稻はいよく榮へ候。いまに穂
も出づるならん。私どもの心も如來の日光に育てられて、益々光榮ならん事を願はし
く候。

暑きの強きは、御慈悲の深きをおもふて、すべてにつきて、御おやの慈悲に感謝し
奉まつらん。

よろこびの光わたれるしるしにや、
春の心はのどけかりり。

さき頃祖山にて、念佛三昧の道場にて、大なるみおやのいつくしみのなかにつどは
れたる同胞相つどひて、大みおやの慈悲の乳房に哺養されし當時のごとく、今日も明
日もいつも同じく慈悲の懷にをりて、益々成長せられん事を祈候。

無量光の中に活きる者は必ず無量壽に活く

如來の慈悲は、天地に充滿し、此の世も後の世も、からだもたましひも何れも皆恵

みなされて、活々と活かさんとし給ふのでありますに、然るに此の身體も精神も大みおやの思召にかなふ様に活きんとすれば、現在から永遠にまで、眞實に活きるのであるにも拘らず、あさましくも子供は自分かつての愚かなる了簡を以て、活き様とするものですから、死の道をしるぐ様になるのであります。無量光のなかに活けるものは必ず無量壽に活きるのであります。大みおやなればこそ、何につけても大みおやの聖寵は感ぜざるを得ぬ事にて候。

只要す如来と常に離れざることを

此頃來は御心盡しの御供養に預り多謝候。御見送を蒙り、無事到着候間御休心被下度候。

善導大師は彌陀身心遍法界、映現衆生心想中と。また佛を見んと欲すれば佛目前に現じ給ふ。故に近縁と名づくこと。念々常に佛を念じ、聲々永しへに稱名し、只要す如来と常に離れざる事を。

如来は心靈を照す大日光なり。如来に向ふ事は光明なり。如来を背にする人はいつも闇黒なり。常に淨土に向ふて進む人は光明にて、三惡道に向ふ人は闇黒なり。いさましく大光明に向つて歩々に進み、念々に向上せん事を。

世の中に大みおやの永しへに、我を感み、又愛を注ぎ玉ふ御むねを誦らすして、闇の中に口をくらすもの程不幸なるはなく候。願はくば大みおやの御むねを普く傳へて、光明のなかに日暮しなざる様に、いかなるものにも御知らせの程願はしく候。

すべての物の物に超へて、最も大切なるは、眞の自己の眞生命と、自己を完成すること候。そは唯自己の眞の大みおやなる如来の光明に照されて、自覺の光明と相成り、又自己を圓滿に成し玉ふ御力は全くあなたより賜はる事に候。

信心の金剛石は一心に念佛して、彌陀の聖旨と、念力とによりて、琢磨する、信心寶石琢磨する故に、彌陀の日光は反映す。日光は照しあるも、瓦礫は反映せぬ。只要す。一心念佛して佛力かゝる處に心の寶石は發揮することを。

如来様と一しよなれば地獄の火の中でも楽しい

如来様はいつもつきまとうてましませどもこちらがにげまどつて居るので居ないかと思ふ。念佛三昧を以ていとなつかしきミオヤと共に離れぬやうにならませう。如来様と一しよなればちごくの火の中でも楽しいとおもひます。

如来さまの御じひを忘れて居りますと知らず三惡道の中に心がすむやうになります。御じひの乳をのむことを怠りますと發育が出来ませぬ。如来のみむねのあらはれをいのりて有りがたし有りがたしと感謝の念とつねに喜ぶことが乳をのむと同じこととであります。

日々のつとめを悦びて

先頃滯在中は御世話になり、種々御親切にして下されたので嬉しく感じ候。矢張り此世界の人間は修行の爲に出て来たのであるから、せつせと一生懸命に仕事をやるべきの事はなした夫が徳である。御身は大みおや様の思召に叶ふて居るから皆さんの口をかりて、つかふて下さるのであるから悦びて、御つとめなされ。なまけて一生終る程不仕合せの人はない。何故なれば、如来の思召に叶はぬから、如来様が使つて下さるのである。それを知らずして、仕合せ等と思ふて居る人があれば、それは大いに間違ひである。如何なる身分でも、皆如来様から御計らひにてあるから、自分自身今日が丁度適當してゐるから、これを悦びてつとめる人は、如何なるつとめをして居ても、満足に日々つとめらるゝのである。この頃の暑いのは、一年食ふ處の米をなる

べく澤山收穫の様にしたりやりたいといふ大みをやの思召から、暑いのである。その思召を知らぬ者は、一年食べる米の稻を能く養ふ爲に暑いのであるといふ事を知らずして、唯暑いなどいふてゐると、遂にはばちがあたつてようきがわるくして、米のとれぬ様になると又なき事を云ふ様な人が多いで、大みおや様の御むねを安じあげる事が出来ぬのである。何年でも、よく／＼悟りて見れば、皆ありがたいのである。だから何でも悦びてつとめよ。

歡喜光裡に新らしき等を迎へ、不斷光中にますく／＼向上せられん事をすゝめ申候。娑婆はうるさいと云ふけれ共、娑婆のうるさいのではない。ウルサイと思ふ御身の心がうるさいのである。だから自身の心から改めて行けば愚知を云ふ程の事は無いのである。此頃の寒さ、火鉢の中の炭火に依りて念佛心を語つて見やう。念佛の念といふ字は人二心にて、二人が一人になつた心の姿である故に、念佛者は骸は二つでも心は如来様といつても一になつてゐる。愉へば火鉢の中の炭火を見よ、此の寒さの中にも拘らず、春の陽氣に麗しく咲き初めた桃の花よりもモット真紅色を呈し、ナーニ此の寒さなどは、何のそのと云ふ様に如何にも愉快さうにカン／＼と陽氣に、快活に嬉しげに火鉢の中に燃えつゝ、そうして愛嬌よく火鉢のもとに接近する人の手を親切にも温めて呉れる。それから御湯を煮て呉れる。又御餅をも焼いて呉れる。だから誰でも愛して居る。其の愛される中心人物の炭火子さんも前身とも云ふべき、炭箱の中に居た時には、イヤハヤ真黒な顔をして、冷たいもの而して一寸でも手を觸れると直に眞黒に汚すものだから誰も手をつける事を嫌つて居た。其の炭さんが今度は火鉢の中へ入りて火と一處になつた處が、前とは打つて變つて、寒い間最も愛される中心となつた。誰でも愛せぬ者はない。炭が獨身であつた時には、ほんとうに嫌はれものであつた。それがサア火と結婚して、二人が一處になつた處がまるで反對に、すべてに愛される様になつた。炭は火を我有がほにして居れば、火は炭を自分の有として食ひ込んでゆく。炭と火と二人が一つになつた處が念の字のすがたである。

私共の眞黒な炭の様な煩惱の心でも如来の智慧や慈悲の火が加はると、炭に火がついた様に娑婆の憂世の寒さも忘れて、大慈悲の火の様に温かに日々に愉快に、ありがたく日暮しが出来る。如来と我と胸の中に二人が一になつた心、念佛心である故にありがたく温かに日暮しが出来る。正月の屠蘇に酔つばらつて道を妙な顔をして通る人は酒と二人が一になつてゐる。其の尊き如来の慈悲の火が、我等が胸の中によくカン／＼とおきる様にするには、南無阿彌陀佛の風が通はぬとならぬ。

忍

御手紙披見候。庵室の事に心配云々。夫れは此の人間界に生きてゐる役にて據なき事、只心に、如来に御仕へ奉るとの安心なれば一切の業作皆佛心佛行にて候。人間は矢張り種々の辛苦して見ねば修行にならぬ。又將來の事は今日一所懸命に御佛に仕へ奉つて、如来様に然るべき様御願申上げて置けば自分で心配せずとも、如来様の方より宜い様にして下さるから、只々今日のつとめを大事にして、明日の心配は明日になつてよろしい。日々ありがたくつとめさせて戴く事になつたが何よりの御慈悲なれば、是から此の上との位まで、如来様の御力が加はりて、忍耐出来得るか。又如何なる事に出合ふても、悦ばれるかを如来様の御試験を折々受けつゝ修行が進みゆくべきのである。

次に肺病人と一處に居る事、其の傳染の事は其の豫防法が意得ぬとうつる。其の意得のなき人は肺病は常人の熱でもうつるやに思ふて居る。決して熱でうつるものではない。タンの中に目に見えぬ微菌が居る。それが澤山になると食器杯また夜具類衣類でも自然々々についてゐて、それが口に入るとか又鼻から吸込むとかすると、身體の中に這入つて其の弱き處について、それが種になつて、殖えるのである。それでも自分の體が達者であれば大丈夫である。だから心配するには及ばぬけれ共、注意しなくてはならぬ。肺病院の看護婦等は、ヒドイ肺病人が何十人となくゐて、其の中に何十

年となく其の病人を看護してゐても、うつりもせぬのは能く意得てゐるからである。達者な人はたとひうつりても自分でも知らぬ位に一生過ぎる人もある。世間には自分で肺病でありながら、それを知らずして、他の肺病人を怖がつて居る人もある。愚な事である。

生きたる爲の念佛

釋尊の御佛行中に阿羅々仙人に就いて、茶をつみ、薪を採り、水を汲む等の種々の困苦をなされし事を聞いて居るであらう。今は御身も阿羅々仙人に就いて、修行中であるから、總て釋迦牟尼と云ふ如き尼となるのである。只の尼ではつまらない。それでも全く御身の修行には阿羅々仙人であるから大切な人である。さて改めて申すまでもないが、愚柄の最も力を盡して弘める彌陀の光明主義は從來の純未來主義只佛さまをだましてなりとも未來極樂に往つて、樂を致し度いと云ふ主義と全く違ふ處は現在から如來の光明中に生活して、念佛も死ぬ爲の念佛ではなくて、生きる爲めの念佛、死ぬ爲めなれば、何も念佛申さぬからとて、生れて來た以上は何人でも死ぬ。たとへ動物でも念佛申した事がなくても、時來れば死ぬ故に、死ぬ爲の念佛でなく、生きる爲とは一心に念佛して如來の光明に攝取せられて、段々と信心心が温められて、遂には卵から雛子がはけ出す様に、念佛して御慈悲の光明に温められれば、信心心がはやけ出して、活きた信仰となるのである。信心が生きて新に生れた信仰となつて見れば實に此身此のまゝ如來大光明中に寝ても覺めても、光明中の住居である。此の信心が生きて來ないうちは、如來様とは死んでゆかねば、光明のなかに居なされぬものと思ふてゐる。光明中の日暮し清淨歡喜智慧不斷南無阿彌陀佛々々々々と心を清淨光の中に愉快に新に清く、歡びと樂しさと、平和といつても取圍まれて、日暮しするのである。此の體につきては、苦しみが大なれば大なる程、如來の御慈悲も深く感じられるのである。此の身は全く修行に來たのである。折角修行に出て來て充分に

修行出來ずして、しまふのは實に遺憾な次第である。
 辨衆の光明主義を以て現在から、如來様と離れぬものとなつて、如何なる場合にも如來の御力を力として、念佛を以て、如來様と離れぬ生命として、今のうちになるべく能く養ひ居りて、後には力のあらん限り、如來様の聖意を世に弘める事の出来る身にして頂く様に、如來様に斷へず、祈りなされ、そればかりが一大事である。自信教人信、如來の光明を盛る器として頂くのである此身を、それを又他人にもわけるのである。

心のすみかえ

或信者の家庭にて、嫁がむつかしい姑を持つて居た。其のむつかしいのは唯むつかしいばかりでなく、其の嫁が憎くて居ても立つてもたまらぬのだけれ共、其の中に於て又能くつとめる嫁には其の村内のすべての者の同情が嫁に集まり、其のつとめを感心せぬ者はなかつた。其れ程衆人に感心せらるゝ程の嫁であつたが、もとく凡夫である。其のむつかしい姑が十年も前に此の世を去つてしまつた。して見れば如何に憎い嫁でも仕方がない。財産は勿論すべての權利も全く、嫁の物となつてしまつた。今日は其の嫁は如何である、どちらかと云へば、贅澤である。財産ある爲に他人も敬ふ處からしても自然たかぶる。今日の處では、平凡以下の婦人となつて何人も其の嫁を感心な嫁と譽め稱へる人は恐らく一人もあるまい。村中に感心な嫁と譽め稱へられた婦人も今日は誰あつて譽める人もない。嫁はもと同人なれ共、前には姑と云ふ銀治屋が能く金鎧を以て、常に鍛へて呉れたから感心な嫁であつた。此頃は銀へる器械がなへて、段々錆がついて來た爲に美點の光が消へてしまつた。まだく求淨庵の嫁などの銀へ加減位では、とても鐵が鍛へられて、立派な力になる事は出來ぬそれでもその位銀へられてさへ、まだく誰も感心しさうな光はまだ出て來ない。それ處ではない。何とかしてもとの鐵のまゝで、いくら錆がついてもよいから、此の

まゝ居りたいと思ふ。實はまた飽くまで、鍛へて頂きて、立派な名剣になりたいと思ふ。ふ愆がないのではないかと思ふ。話は別にして、何處かもつとく厳しい。本當に厳しい老尼が世の中にあるかないか解らぬれ共、左様な處へ行き、修行したら宜いと思ふ。何でも自分の心が一番大事である。心にかけて居れば、何時でも何處でも修行は出来る。人の生涯は唯如來の光明を獲得して、明の生活、光明に活動する處に眞の價値がある。此の目的を達せずして、生きてゐるのは無意味である。兩三年何處でか修行させて頂く様に頼みてみなされ。つまりはまだ修行不足であるから御意に適はぬのであるからといふて、修行させて下されと頼みてみなされ、又能く考へて見ると實は氣の毒なわけである。自分で自分の心に苦しめられてゐる。それはやはり、一の病氣である。だから自身でも心は苦しいに相違ない。どちらが苦しみがつよいか思へば氣の毒なわけである。能く考へてごらん。自分の心をすみ換へねば何處へ行つても同じ事である。

此頃流行感冒にて、風の神をを宿し申して、熱やら苦痛やらに襲はれて、動もすれば冥土にまで連れ行かれ候ものも少からず候。願くば大慈悲のやや様を常に煩惱の中に御宿し申して、日々々にありがたき樂しき力ある生命ある光ある生活に入りて、而して後にはみおや様に誘はれて、清き御許に行くこと實に樂しきに非ずや。却説御尋ねの九州行は當年は行く事出来ずして、當地方に於て傳道致し候。

苦にも難にも遭遇して一心を磨き

月日のこまのはしり行くあしなみのいとやく、此ほどまではあつた耐えがたきばかりに、おぼへし夏の日はいつの間にかはや過ぎさりて、も早や物さびしき秋の氣候とはなりはけらし。すだく虫の音聞くときは何となく秋の夕暮のさびしさを感じら

る。

蟹下の園生の尾花の穂について風のまに／＼舞ひぬれば、うたふ虫の聲に自然の天樂は草も虫も同じくしらすく。歡喜光の恵みに自らはたらけるさまとやおもはるるべし。

きよき同胞なる人々よ、有爲の世の、ならひ常なき此土のをきてなれば、生るゝ者は必ず死す。遇ふ者は定まりて離るる規定は免るゝこと能はざれば、さきつ頃、蟹下の園生に至りて、ともに

大ミオヤの御恵みの恭けなさを語りともに御ひかりのなかに日々喜ばしき日ぐらしをなさばやと契りて樂しかりし日は、早や既に過ぎ去りて、いまは過去とはなりにけらし。然し乍ら共に

大ミオヤの光のなかに、こゝろはともに、ありがたく、悦ばしく日を暮すことはたとひ、いく重の山と雲をへだてぬるも、決して離るゝことなきは信念のことにあり。皆様よ、人が以世に生れついていでたるは、たゞ肉體の快樂をもて、幸福と申すことにてはあらざるなり。此の世に出でたる目的は、種々の苦にも、難にも遭遇して、一心を磨き、而して

大ミオヤの御恵みと、御ひかりとをたのみて、大ミオヤの御むねに、かなふ人として、たましひが、みひかりに靈化せられて、如何なる苦難の中にも、進んでそれを甘受するやうな、精神になるべき修行を爲すこそ、人生の目的にてあると、信する時は天の大ミオヤの思召しにかなふが故に、からだよりは精神に幸福を感ずる様になるなり。

であるから、たとひいかなる事に遇ふとも、是のために修行が出来、磨きが出来と思ふて、進んで悦ぶやうに信念を大ミオヤによりて養ひたまへよ。

此の度の因縁によりて一家心を一にして、大ミオヤを、たどることになりしは誠に喜ばしき次第なり。

殊にまた特別にあなたがき、よき信佛心は泉のごとくに湧出して、明かにたふとき聖經を、よみなされしことの目出度さよ。大みおや信じ、とあなたを、もしや永遠にたとひ天地は盡くる時あるも、盡る時なき、きよき同胞として、たのもしく思はるゝなり。

御一統の衆がともに、大みおやの光によりて、口にくかたじけなき日ぐらしを爲すやうになり、またの世も、ともにく大みおやの樂しきみ國にいたり諸の上善人とともに一處に會すると云ふことを得べき御心と成りてまたいかにうれしからん。

あなたがまことにく大みおやの光によりて真にいける觀世音ぼさつと成て皆さまをみちびくことになるやうに、ひとへに御たのみ申し候。

如来様を御佛壇の中にをさめて置いて自分一人に成つてはるませぬか

暮の忙しさに、まぎれて、

いける如来さまを御佛壇の中におさめて置いて、あなたは、自分ひとりに成つて焦つて居りはせぬかとおもはるゝなり。

念、二人の心になりて居りますか。

佛さまと一所に居らぬと、殺鬼の鬼に胸の中に宿られて、苦しめぬでもよい事に苦しまなくてはなりません。

佛さまは、いつでものどけき春の心地して御座るから、外がせはしければ、せはしいほどのどかな佛を胸のうちに安置して居らぬとちがひます。

それから皆さまに御たづね申すことあり。

宗教は安心が大事にて候。安心と云のは宇宙間に二人となし如来と、いかなる事情の下にも離別の出来ぬ結婚のことに、心靈が如来と結婚して、此世後世生命も魂もすでに一任して、アナタのものとすることである。そうするから如来も亦我有として

いかなる場合にも、偉大なる御ちからを加へて下さるのである。生命も献げて一任すればこそ、此の罪の深き地獄一定の悪人を却つて、可愛と思召して、御憐れみ下されたまふのである。

あなたに御尋ね申します。

若しあなたが、病氣とか、また何かの事で他の佛とか神とかに、祈禱せざれば、命がたすからぬと云ふやうな場合には、如来さまを、さしおきても大事な命のことであるから、他の神佛をたのみますか。また已に如来さまに献げた生命であるものいづれにても、如来のよろしきに一任して、安心して、他の佛や神をたのみ事をしませんでせうか、あなたのいつはりなき告白を聞きたい。

あなたとの安心がかやうでせうか。

あみだ如来よ、あなたの外に決して他の神や佛におまかせ申しませぬ。あなたの外に私の大みおやは有りませぬ。あなたの外に妾の魂を御まかせ申す御方は有りませぬ。あなたの外に妾の胸の奥をうち明けて御たのみ申す方は有りませぬ。

いかなる事情の下にも他の神や佛を、御たのみ申しませんと云ふ様な全幅をさし上げて、如来に御まかせ申す。如来に對する眞の信情の掬が立ちませは、眞の美しい安心である。

如来様の御慈悲の面かげが彷彿として眼前におもはれますか、夜のめざめの中にもなさけ深きおやさまがしられませぬか。

徳本行者が、あみだくんと聲するひとの胸に佛の斷間ない。

我がみほとけのじひの面、朝日の方に映るひて、照るみすがたをおもほへば、靈感さわまりなかりけり

心は同じ御光の中

百の山、いく重の雲は、へだつれど

昨日は懐かしき御地の里を辭せんとするに臨み、きよき吾同胞の君たち紙ふかきまこゝろを注ぎ王ひて御見立にあづかりしことは、實に厚く感謝する處なり。

汽笛一聲流れゆくけぶりのなかに、なつかしかりし、君たちの御面かげはかくれてしばしのほどに、山邊より里いくらとなく越えたる此處と彼處とはなりにけらし。されども御互ひに心は同じ大ミオヤの、みひかりのなかに、平和にくらし居るものと思へば悦ばしく存せらるゝなり。

さて此たびは、おぼろげならぬ因縁にもようされて、幾ばくの日を重ねてねんごろなる御もてなしにあづかりしことの深き思召しに對しては大いに感謝し奉り候。殊に、悦ばしきは皆御心を一にして唯一に在ます大ミオヤに歸依信賴して此世、後の世ともに御任せ申し上げて深き信念に發し玉ふにいたりし事にて候。

しかる上は皆様と日々に同じく大ミオヤの聖旨をたよりおめぐみにはぐくまれて同じく光明の中に生活し、而して此世の事を果したる曉には、同じく光明永しへに輝く處の樂しきみやこにておたがひにきよき身となりて、かたり合ふことを、うるものとゆく末かけて、いかばかりか樂しく存じ候。

御光によりて心を取りかへて戴けば悲も變じて

喜に不幸も轉じて幸福に

歡喜光の中に年を迎へてめで度くお祝ひ申し候。

願はくは光明會のきよき友の衆よ、眞實に光明の中に意義のある光明の輝く新らしき年を迎へて一日くになますく光明に向つて突進するやうにいたし度く存じ候。

舊いといふも新たらしいといふ。實は假の名目にて、新らしい年を迎ふるは、迎ふ

る度毎に實は人間は舊く成つてしまふ。それでも心のうちに如來の光明を信得すればまた、新らたなる光明を發見すること限らない。

人間は何が一番仕合でせうとなれば、先づ私は本とうに親を知りて、親の慈愛に抱かれていつまでもをることが出来る人であるとおもふ。さればとて人間の親はさういつまでも、一處に居ることは出来ぬ。此の世はぞろか未來遠きにまでも、離れずに大なる慈愛の光明に懷かれて居る御互は此上もない幸福ではありませぬか。

此世の中に大なるミオヤの在ますことを知らずして、あたらし人生を氣儘、我儘に空しく徒らに闇の裡に葬つてしまふ人は、本とうに親様に對しても不孝のみならず、自分でも本とうに損であるけれども、左様な人は只だ氣儘に發澤で世を送れば眞の損といふことがわからぬ物故、選て其の方が幸福だと思つて居る。夫れと云ふも大ミオヤの聖意が少しもわからぬ故である。又人生は何の爲めに生れ來りしや、目的が何の爲めとも定まらぬからであるとおもふ。

とても此世の中は何事とても、さう思ふ様には行かぬものであるから自分の心で大ミオヤを一心に念じて御光明に寄りて心を取りかへていたゞけば悲しみも變んじて喜となる。不幸も轉じて幸福となる。是ほど有離い光明が常に身邊を照しあるを知らずして、自分に自分で罪を造り、苦しみも構へて、日々に日暮しをする人は本とうに可愛さうである。

どうかして大ミオヤの光を世の人々に、しらせ度くおもふて、夫れのみを思ふてをり候。

和泉式部の更生

生者必滅は人界の習。會者定離は浮世の掟なれば、大聖釋迦如來さへも、ついに涅槃の雲に隠れ、紫摩金色の御身も亦旃檀の煙と消えはてぬ。實に世の無常のさまされば朝に咲ける花、夕の嵐に散りやすく、夜にむすぶ露は、朝日の前に消えはてぬ。實

に頼みがたきは、世のさまなれ。

たゞ頼むへきは、慈悲の親さまより外に便るかたなく候。悲しみ深ければ深き程、慈悲の親さまをふかく御頼みなさる様に願はしく候。

慈悲の親様はすべての衆生の大ミオヤにてあれば、すべての子を愛したまふこと一子のごとくに思召し玉ふてましますならめ。

昔、和泉式部は一の愛子、小式部の内待に先だたれ、何とも悲しみのやる瀬なく、なげきて

もろともに、昔の下には朽すして、ひとり憂きめを見るぞ悲しき

と詠まれた。とても死ぬならば、もろともに、死ぬがましである。ひとり残されて憂き目を見ることの、うたてさまよ、と堪ぬばかりに悲しまれたが、性空上人の教に本づきてのちに彌陀の本願に乗じて念佛三昧の信念を一つにして、ついに如来の慈悲の光明に照護せられ光明に觸れてからは從來の心の闇も晴れて心も生れ更るほどにありがたき心となりて、光明の日ぐらしになられた、その頃の歌に

ゆめの世にあだにはかなき身を知れと教へて歸る子はほとけなり。と、

能く自分が信仰の目を覺して眞實に如来の御慈悲がわかるように成てかへりみれば自身が全く眞の信心もあらはれ、光明の目ぐらしに成ることができたのも、其の本はと云ば、我子が智識と爲りて我をみちびきてくれたから全く信仰に入つたのであるして見れば我子とは云ふもの、彼小式部は如来の御使として我を信仰に入れて呉たのであると。

これは昔の話のやうなれども、やはり先立たれたる一子は諸君を永い未來の一大事の安心にみちびくように、如来様からの御使でありますから、どうぞ一心に慈悲の親さまを頼み参らせ、一心に念佛を稱へて光明に接するやう、御勸め申します。皆様の御心が如来の御慈悲の光に接して全くあの子に接するやう、御使ひであると信心の眼の開いた時、一子も慈悲のふところに抱かれた時なのであります。

病

御不快のよしに承り直くさま御たつねまでで手紙差し出し度存じ候へとも伊勢の國にても非常にはせしなくまた尾張の國にても同じく忙殺せられ尾張をしまふて當國にうつらんとするに先ち、風邪に侵され少しのこと、押してやつた所が急ちに

大ミオヤの聖旨にかなはぬ爲にてや重きかせと成りて日中休むことは出来ぬけれども随分せつなくありました、それでも此のせつないので平生無事の時の時間の貴重な事を示されたものとすれば今更に

大ミオヤの思召のほどを有りがたく感しられて候。(中略)

御病氣にてたとへ病床にありても偏に大ミオヤの大なる御じひのほどを念じ而してこゝろを大みむね廣き大なる中に遊はして萬事うちわすれて仕舞うて心をきよき御くに即ち光明界に羽化して心はしやばのものでなく観音様に誘はれて樂しき無爲の都に逍遙することに心の運ひかたを習ひなされ候様はなんおすゝめまいらせ候。

御病氣中を機會として世の塵を心に離れてしまうてきよき國の人と相成候やうになされ候べくと存じ候。

しかし乍らそれとしても肉體は食物によつて活けるものなれば成るべく牛乳その他御病中は養分に富める物を御取りなされるやうに爲し玉へ。

はやく御病氣をよくせぬと此の世に於てのつとめもおもふようにならぬことなればからだは養分にてよく養ひ心は天の大ミオヤによつて養はるやうになさるべく候。

人間に死ぬ生命と永遠に死なぬ方との両面

歡喜光裡に新らしき年を迎へ

不斷光中ますく光榮あらんことを祈り候。

年の始めに大ミオヤの光明の實に有がたきことを申述べます。

如來様を超日月光と號することに付いて、なせに太陽よりは如來の光明は尊いのでせうとなればたゞ目には見へねども太陽の光で造られた物と如來の光明にて養はれた物と比較して見るとわかります。

たとへばすべての草木でも米でも麥でもそれから人間のからだでも他の動物でもかたちの活きくとしてゐるものは皆太陽の光にて造られ活かされ居るものである。愚人も小人も聖人も賢人もかたは太陽の力で活かされてゐる。

釋迦さまも弘法大師も法然上人もすべて彌陀の光明に依つて活かされて居る精神生活の人格は只太陽ばかりで活きてゐる人とは大に異つて居る。

あなたもそうである。また如來の光明の信仰に入らぬ前は只太陽の力だけで生活して居たので信仰に入つて如來光明の生活に入ると精神の狀態がかはつて來たでしやう。永遠に活ける生命となつたのであるから。

人間に生れてのちに死ぬ生命とそれから永遠に死なぬ方と両面もつてゐる。

如來の光明に依つて復活したる人は永しに死なない心靈がめさめて來たので、如來によつて復活せぬ人の精神は生死に流轉するのである。不死の心靈は雛のやうなもので、御慈悲のあたゝかみをうけぬと佛性の雛子とあらはれて來ぬ。卵殻から出た雛子のやうになると天地も廣く感しられます。ますく信念の卵にせられんことを希望に耐へず候。

ねてもさめても如來に離れぬよう

權化の釋尊三十二相の御身も、娑羅雙樹の滅をとり、金剛不壞の身も、罽檀の煙と化し給ふ。されば何人も逃れ難きは無常の殺鬼、されども貞子大姉には阿彌陀尊の御前にて、稱名の中に去られし事なれば、定めし九品蓮臺の中に必ず生れし事ならん。只如來の聖名を稱へて手向け申し候。定めて御老體の杖を失ひし御心地は如何ばかりか淋しくあらせらるゝ事ならんと同情にたへず候。只々宇宙に又なき一人の大みおや

なる如來をあなたに本願に順じて、偏に聖名を稱へて、寝ても覺めても如來と共に離れぬ様なされ候事祈上候。何事も皆夢幻のなかにして、只々大慈悲のおや様ばかりが覺めたる方から、常に私共を呼び起して、闇の中に落込みてしまはぬやうに、御護り下さる。我口に稱へる聲も、るやう、あなたの喚聲にて候。願はくば慈悲の御懷の中に安かれ。

仰ぐべきかな如來の光

惟んみれば、時光のうつり行く事の疾き事、むかしは駒の隙を過るに譬へしと雖も今は電車走りゆくにも譬へんか、何事も未だ運びゆかぬに、月日はいつの間にか過ぎ去りぬ。世の人々を見るに受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に遇ふとも、佛の光明を仰ぐに由なく、闇より闇に入る憐さよ。

仰ぐべきかな、如來の光、我々は五欲六塵の中に、六根常に心を汚しつゝあり。若し如來清淨の光に依らずして、如何でか身心を洗濯する事を得べき。一心に心を制して、如來清淨の光明を憶念し奉れば、六塵にまみれし心も潔くなりぬべし。我等の感情は諸の煩惱、常に胸にもえつゝ己れ己れを惱ましつゝあるも、如來歡喜の光明に靈感極まりなき歡樂を感せらるゝなり。

之れ又思へば、益々法喜禪悅の樂しみは、如來を憶念する胸のうちより湧き出づるなり。智慧の光明に依りて日々に觸目對境すべての事に付きて、其理の發見する事をうるは偏に是れ如來智慧光の賜なり。不斷の光明は、悪しき我が意志を殺して正善に向はしめ、益々聖に進ましむるは、是れぞ光明の力なり。ありがたや。

女史よ、離れ給ふ勿れ。

婦人會

御玉章拜見仕候。御志願に係る處の佛敎婦人會を催し、有縁の婦人衆を如來光明

裡に誘引せんとすの御事、かねても承はり居り候。實に此の志願に對しては、滿腔の同情を表し候。辨榮が宿昔の願望なる婦人を佛教に感染せしめて、各家庭に於て如來の光明を實現せん様になるは、如何に喜ばしき事にて候。

曾て申し述べし如く、將來佛教尼衆をして、傳道に従事せしむるには、從來の習慣を脱して、天主教の尼衆の如く、活潑なる傳道はととも相成り難かるべければ、各室を以て、家政科及裁縫の傳習所として、正しき規則を設けて、佛教思想を養ふ事にして授業の前後には大みおやなる如來の前に、祈禱を捧ぐる様にせしめて、同規の傳習所十箇所位も出來なば、一人の巡廻傳道師を設けて、月に二回の教會を催し、其の節は生徒は勿論、生徒の姉妹朋友等を以て組織したる會員を相集め、各人の安心立命は勿論、家庭にも應用すべく、宗教的知識を養ひ得べき限りは、婦人として又一家の主婦として、遺憾なき様に致し度し。後來尼衆としては、以上の如きの事業及び育児看護等の慈善事業を以て、社會に貢獻するに非ざれば、實に無用の長物として、世に棄捐せらるゝ事必せり。又光明的家庭を造るべき教師となるべき宗教の女教師は、文明國といはるゝ歐米に於ても、多く存せざるを以て視れば、世勢に應じて活用する尼僧は、強ちに排すべきに非ずと信す。

併て會員を組織するに曼んでは、佛教の光明を興へて、光明中に今世後世ともに、生活せしむるにあれば、信仰心の所依なる處なかるべからず。淨土教所依の聖文は、三部經なり。三經は又廣博なり。依つて三經中の粹を抜きたる如來光明、歡、德章を以て、會員信仰の所依とし、會員はこの聖文に依りて、如來光明に依りての修養を加へ斯の光明に依りて、活動し相互に照し合ひ、全く光明中の人たらん事を目的とし、之を家庭に示現し、社會に及ぼすなり。

自己に記す歴史の飾り

實に之れ人間世界を相續し行く常なる事にて候はむなれども、或は親や又其上の親

を養ふ爲に憂ひをなすあり、又子や孫の爲に心を痛めざるべからざるあり。女史よ、人間といふものは、歴史的生活をなすものであると、生涯の歴史を過去已に閱みし現在に讀みつゝあり、未來に閱せんとしあり。一人一部の春秋は、單純な様なもの、隨分複雑なものにて、吉凶禍福種々の轉變の世の流の七轉八起といふのも、人間歴史の始終にて、盛衰の編もあれば、平和もある戦争もある、榮華の夢を見る春の夜もあれば、獄の中に長き秋の夜を呻吟しつゝ暮すもあり。又小説的生活もあれば、活劇を演ずる事もあり、昨年は無事と云へば今年は無事、笑ふて暮すもあり、泣いて暮すもあらう。されば世の諺に、苦は樂の種、樂は苦の種と。女史よ、苦は樂の種にしあれば今日の苦、明日の樂の國なるを知り給へよ。無事と平和は何人も好む所、然れども無事ではかり過してあれば、歴史に記す事はなし。種々の艱難憂鬱困苦快樂等は、皆自己に記する處の歴史の飾りにてぞあり。實に耐ふべからざるとも耐へ、萬難に勝ちて辛らくも通りぬけたる事實は、老いて後、價値の高きものなる故、衆人の唱ふる處まゝそれでもよくやり通して來りし事と、自から老いて後如何に慰藉を興ふるものと。

女史よ、このかたちに子又孫を思ふに付きても大みおやの我等にかけさせ給ふ自然の御いづくしみを推し給へよ。子の母をたよる如くに大いなる母をたより給へよ。

尼衆

めぐり／＼と御書翰に接し候。求淨庵にて尼衆學校の事は大いに隨喜に存じ候。實に現在の尼衆學校は、學生を養生するに不完全と思はれ候。其の證據には卒業後宗教の爲に何の業をもなし得ず、誠に宗教の爲に殘念に存じ候。御尋ねの海沼老尼は、かねても申上候ひし如く、從來の亡者追佛教を脱して、有爲なる婦人團を造るべく有之候。如何にかして方法立ち候はゞ、求淨庵にて、尼を養生する事に相成り候はゞ、幸の事に存じ候。

又尼衆養成と共に、之を時代相當に使用する傳道所も必要に候。例へば女子師範校卒業の女教師には、其の各々小學校なるものあり、上へ使用する如く、尼衆は既往は學校卒業後も庵室にて、木魚叩くだけの仕事の外に、道なきが如し。今回其尼衆の傳道使用法をかようにして、試験場を設立せんとす。

先づ志し深き尼衆、及びウバイを十人許り募集し、傳道の便宜上五ヶ所に會所を設け、各所に於て、婦人會を設けて、其の會員に佛教家庭を造べき修養を施して、月に二回出席し、三年後に卒業證を興ふ様にし、其の間に宗教的修養、人格陶冶、家庭の智識を興ふ。其教會は從來其の例なきを以て、之を設立する手始めとして、團教員は其の得意を以て、或は裁縫、又はオルガン、茶、盆石、花、家政科、作文、習字何なり其の得意の業を一に施し、無報酬にて智識を施し、それから、其の目的に導く事。

團教員は、尼衆ならば何分の収入ある寺をもち、其の財産にて、ウバイならば自分の財産、何れも極めて簡易なる生活の出来得る様にし、其れにて經濟を取ることにし、初めより給料の爲に、教授するのであると、動もすれば給料の爲に、奴隷となりて、理想の如くに佛教を及ぼす能はざれば効なし。今埼玉縣下にて其模範地を組織中にて候。已に二ヶ寺を尼僧地となしたり。尙三ヶ寺ばかり見込のある寺をかり、五ヶ寺合せば米も百何十位の収入あり、以外に四五十俵の収入ある田地を購入せんとす。之れを以て團教員の生活費にあて、先づ始めは、なるべく寄附等を作らずして、犠牲的に従事する志の婦人を募集し居れり、尼僧二名宿より來り居り、尙尼僧もウバイも見込ある者三四名は有之候。女子が小學校卒業して、其後人格修養の機關なきは、遺憾の次第なり。

私は思ふ。若し此處に同等の頭腦を有する二女子あり。甲は六年の小學に、二年の高小を卒業し、而して、後は一向に學事を顧みず、又乙は六年の後高小は斷じて修めず、然れども毎月二回の教會には必ず出席して、人格修養及び家庭智識を興へらるゝ

事、三年又は七年に及ぶ。若しこの二人の人格を比較せば、いかん(中略)
觀世音の表示、觀音は如來と衆生との媒介者である。如來即ち親が子に對して、母の様に慈悲をかけて、子を養ふ姿、又如來に向ふ時は、兄弟姉妹の兄弟となりて、弟妹たる衆生を携へて、如來に導いて下さる様に、兄弟なれば、弟は兄に依らなくてはならぬ。觀音の信仰者の模範を示し、頭に彌陀を頂かば、信仰心中に如來の常憶念を現はし、如來我にあれば、麗しき顔常ならはるゝを現はし、水は如來心光の法水衆生の三垢を滌き、清く祈念して又新ならしむるの表示に候。

オーガスチンの母

昔、キリスト教の中興の偉人に、オーガスチンと云ふ聖人あり。其の母は非常に熱心なるキリスト教の信者であつた。夫れを自身の熱烈なる信仰から、考へて見れば、人間に生れた甲斐がない。夫れで自分の信仰の如くに、全ての人々に信仰を持たせたい。夫れにしては自分の一子、オーガスチンを宗教家にして、すべての人に自分の信仰を頒つ事にしたと云ふので、竟つに其の望みの如くに子息を基督教の偉人として世界に宗教を弘めて母の信仰の如くに世界の多くの人に及ぼしたと云ふ。

貴婦もオーガスチンの母の如くに倣ひて自分信仰の妙味を深く味はひ、能く管めん生の一大事何事か此に如くと、何うか自分の味はひつゝある如くに、此の妙味を自ら世の多くの人々に及ぼすこと能はざるが故に、子息をして、今自分の味はひを一切の人々に頒けしめんと。夫れにつきては、貴婦自ら能く宗教の眞意を得給へよ。私は貴婦の爲めに深く信仰の妙趣に至らしめんことを欲して止まず。世間は宗教の眞意行はれず、宗教家も從來は大いに衰頽せり。

然れども、是れ今日は過度の時代にして、舊式は已にすたれて、まだ新式あらはれざる爲めのみ。最早や世は新らしき宗教の曙光は放たれり。曉きまた遠からざるべし。

とまれ愚衲は貴姉の信仰の念よく、深きに詣らむことを望ましまし、御勸め申すこと斯くの如くに御座候。

稱名も讃歌も要は光明をうけるため

大ミオヤは法身、報身、應身との三身在りて、而して法身は宇宙全體なのであるから、太陽でも、あをぞらても、どこでも大ミオヤの御身と心とか、みちていますのであるから、秀夫さんのからだでも心でも其の元素は法身佛の分れなので、恰も卵のようなものである。卵はあたゝめて鶏に孵化されなくてはつまらない、卵をあたゝめるのは、母鳥であるように、大ミオヤは報身佛で慈悲と智慧との光明を以て、あまねく照しわたりにて、人の心霊をあたゝめて聖き心として下さるのであります。其靈光を被りませねば、鶏の子が、かゝるるように佛の子となることは出来ませぬ。そんなら、如何にしたならば、其の靈き光明を、まうけにうけることが出来ませうとなれば、大ミオヤの尊き御名を稱へるのも、また讃歌をうたふのも、要りはあなたの御心の光明をうけるためなので。

たとひ太陽の光を見ても是も大ミオヤの光明と、おもふて一心に念すれば矢張それ信心増長の縁となるのです。寝ても覺めても大ミオヤ様を念じて居れば佛の子の卵に孵化するです。

それは應身の釋迦如來が此人間界に御生れ出なされて御親切に教へて下さられたので

秀夫さんの體はそうふとりかへつて居らぬでも、大ミオヤの慈悲と智慧との靈光に依りて心霊の方が益々育ちますれば、御慈悲の深い麗はしいオカーサマの靈容に接することが出来るのです。

大ミオヤは神聖と正義と恩寵との三徳を以て子どもを御育て下さるのです。神聖とは智慧の聖いので真理の智慧で聖い了簡にして下さる正義は邪や悪を避けて正しい善

い意として下さること恩寵は大ミオヤが大きい御慈悲で子らの聖き靈き心を育て下さる御恵であります。御恵に育てられて肥えて來れば自然とよき心と成りよき事が出来るのです。

それから山崎といふ姓などは、辨榮の精神ではないので、眞の姓はアミダてふ無限の光明と無限の生命なのであるから、心靈さへ育てばほんとうによいのです。それでもかゝりの姓も欲しくは、また時も來るだらふとおもふ。

道徳の根底

體智徳何れも平行して發達せされば他日實行の曉、人生實際の競争場裡に於て好良の成績を擧ること能はざるは夫こそ實に遺憾の次第に候。

今や我國家、國民の體智徳の三育に就て大いに注意を拂ひ、力を注ぐに至りては大喜ぶべき事にて中に就いて最も善良の國民を造るは未だ根底を確定せず我國民が人生は何れに向つて何に歸着點を定めて國民の精神を指導すべき歟を知らず。道徳と云ふ者は只だ忠信孝悌に止まる如くに思ふてをる。抑も道徳の最大根底と云ふ者はもつと深い處に根ざしてをる。

若し孔子の言を借りて云はゞ、天の命之を性と云ふ。性に率ふ之を道と云ふ此處である。

人には天命の性として人の精神の奥底に佛敎で云ふ愛の佛性と云ふ公手無私のもの、之を磨く時は金剛石の如くに道徳の光を放つべき性を以て居る。然れども金剛石もみがかずば玉や光は添はざらんの御詠の如くに其の法性は具有して居つても磨かざれば光は發揮せぬ。信仰は此の法性を磨く金剛砂である。天に在つて道徳の道を照し給ふのは佛敎に云は、

即ち無量光如來である。無量光如來は大靈界の太陽である。例へば天に太陽がありて其の光りが金剛石に反映する如くに、無量光如來の光明は信仰にて磨きたる人の心

性に反映する。地上に於て有ゆる世人道徳家中の大道徳家釋尊の大なる金剛石に宇宙に輝ける無量明如來の光明が映寫して、そこで釋尊と云ふ世界第一の大道徳の光を以て世界に教化の功を施し玉ひし。

何人も佛性の金剛石はもつて居る信念を以て磨く時は靈の太陽無量光如來の靈光に映寫せられ充満され靈化せられて、人格も革新し世を度すべき光明は如來より授與せらる。

秀夫子よ將來斯の如き天より使命を蒙るべき身なれば、とひ今人間の試験に於ては左までに落膽せず將來來るべき大なる如來の實地の試験に於てこそ全心全力を捧げて竭すべきやうにせられたし。新年の辭として是の如くに候。

大正十四年五月二十日印刷
同 廿五日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)
年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人

印刷人 小林 七太郎
東京市小石川區茗荷谷町九八

發行所 ミオヤのひかり社
東京市小石川區水道端二ノ四四

振替東京六六八五一番